

トレンド提言

人の生きざま 一麗しさと醜さ一

麗しさは愛わしさであるが、このところ新聞・雑誌の文字には見当たらない。その意味は端正・礼儀正しい・壮麗・見事・秀でていることと辞書にある。現代語の「カッコイイ」とは意味合いが異なるとは思うが、如何だろうか。一方、醜いは見悪いとも書く。その意味は見苦しい・見にくいである。

小説では、最近の社会の動きの中から、麗しさと醜さを取り上げてみた。

○大谷選手の麗しさに学ぶ

今シーズン23歳の青年大谷翔平選手の大リーグでの活躍に日米の野球ファンは感動している。投げる打つの「二刀流」を目指し、その実績は予想以上。

4月の月間MVPにも選ばれた。その勇姿は端正と表現するのがふさわしいと思う。

「一心にことを成さんと思い立つそのたまゆらの尊きものを」（若山牧水）

投・打「二刀流」というが、野球は本来これが原点だ。高校・大学野球はこれが当たり前。プロ野球は試合数も多く専門分化してきたので殊更に注目されるのだろう。

大谷選手のすばらしさ、麗しさは、次の点にあると思われる。第一は、打つ・投げる・走る、いずれも全力の一投一打だ。プレーに望むに際しては創意工夫を重ねているという。そしてプレーは並みいる大リーグ選手の中でもトップクラスだ。第二に、ファンへの対応だ。少年にバットをプレゼントする姿は、ごく自然な振る舞いに見えた。野球少年に対して親切であり愛がある。成長を願う育みとなろう。第三に、大リーグへの挑戦スタンス。“カネよりも夢を選んだ”と報じられている。（契約金2億3000万円、年俸6000万円）この“夢”は“大志”であると読みたい。俗に言われる「アメリカンドリーム」とは似て非なるものと見たい。野球は球場内はもとより、場外でもフェアでありたい。

経済社会はもとより、政治も文化もスポーツも、マネー優先の現代社会の中で大谷選手の志はまことに麗しく、惜しみない称賛を贈りたい。将来ともフェアプレーの初心を忘れずに、健全に成長されることを期待する。

○醜さの事例を見る

〔高級官僚の女性記者に対する「セクハラ」問題〕

福田淳一・前財務事務次官のセクハラ問題で、女性に「はめられた可能性は否定できない」と繰り返した麻生太郎財務相。批判を浴びて撤回したものの、問題発言は自民党内で相次いでいる。女性に対する心ない発言が後を絶たない。

福田淳一・前財務事務次官 (4/16)

「お店の女性と言葉遊びを楽しむようなことはある。セクハラに該当する発言をしたという認識はない。」

矢野康治・財務省官房長 (4/18)

「弁護士に名乗り出て、名前を伏せて仰ることはそんなに苦痛なことなのか」

自民党・長尾敬衆院議員 (4/20)

「(セクハラ問題について講義する女性議員らについて) 私にとって、セクハラとは縁遠い方々です」※22日に撤回

下村博文・元文部科学相 (4/22)

「(福田氏は) はめられた。隠しテープで録っておいて、テレビ局の人が週刊誌に売るって事自体がある意味で犯罪だと思う」※同日に撤回

自民党・加藤寛治衆院議員 (5/10)

「必ず新郎新婦に3人以上の子どもを産み育てていただきたいとお願いする」※同日に撤回

麻生太郎財務相 (5/11)

「(福田氏) 本人が(セクハラは) ないと言っている以上、あるとはなかなか言えない

- ・セクハラ (sexual harassment) とは性的な嫌がらせ。法的にはわが国の法律では猥褻罪 (刑法174～176条) があり、わいせつの定義は「一般人をして羞恥嫌悪の情をいだかせる行為」(高裁判例) とされる。一般的には文字のごとく、
みだりに褻りに褻すことだ。政府は現代社会において「セクハラ罪という罪は存在しない」との閣議決定をしたようだ。財務大臣の一連の言動に政府は連帶して開き直った感を否めない。大切なことは今回の「セクハラ問題」は罪を問うたものではなく、政府高官等の卑猥な振る舞いに対する政治的・道義的責任のとり方に国民が不信を高めていることに、関係者は自覚し、改めることだ。
- ・「セクハラ」についての一般常識と国民感情と一部国會議員、官僚との価値観のズレが窺える。同時に麻生大臣の常識外発言を不当に忖度せんとする醜さを露呈したものと言えよう。
- ・自民党女性局長を務める太田房江参院議員は、一連の問題発言に「受け取る人がセクハラだと思ったらセクハラ。それも知らないなんて」と落胆する。女性への配慮ない発言は「以前からある問題だ」としつつも、財務省セクハラ問題をきっかけに表に出てきやすくなつたと感じる。(出所:朝日新聞・5月13日)
- ・この問題は単なるセクハラ問題と解すべきではない。民に対する「エリート集団」や一部国會議員の誤った官民格差の顕れと見るべきだ。同時にこのことは彼らの人権意識の低劣さと言わざるを得ない。

〔学校法人「加計学園」の獣医学部新設をめぐる疑惑〕

この問題に関する国民の疑惑は次の点にある。各種世論調査（5/21）では78～83%の人が納得できないとしている。

- ・獣医学部新設については、加計学園は15回にわたり申請したが、文部省や農水省・獣医師会の反対により実現できなかった。こうした中、「国家戦略特区」（議長：安倍首相）という新たなシステムが作られ、加計学園だけが認定されたのは何故か。
- ・加計学園加計孝太郎理事長と安倍首相は長年の親友関係にあることが、新設・申請・認定に関わりがあるのではないか。
- ・安倍首相や当時の秘書官は一連の経緯に一切関わっていない、とこの1年半国会等で強弁を繰り返してきたが、そこに虚構はないのか。

この間の経緯について5月21日、愛媛県は参院の要請により、国会に文書を提出した。

愛媛県文書の主な内容（日付はいずれも2015年）

- ・2月25日、加計学園理事長が首相と15分程度面談。理事長が今治市に設置予定の獣医学部は国際水準の獣医学教育を目指すことなどを説明。首相からは「そういう新しい獣医大学の考えはいいね」とのコメントあり
(3月3日の学園関係者との打ち合わせ後、県地域政策課が作成)
- ・学園理事長と総理の面談を受け、柳瀬唯夫首相秘書官（当時）から資料提出の指示あり
(3月15日の学園関係者と今治市の協議内容について、報告を受けた県地域政策課が作成)
- ・総理と学園理事長の会食の際、獣医師養成系大学設置について地元の動きが鈍いとの話が出た
(4月2日に予定された柳瀬氏への訪問に関連し、今治市から報告を受けた県地域政策課が作成)
- ・獣医学部新設の話は総理案件になっている。なんとか実現を、と考えているので、今回内閣府にも話を聞きに行ってもらった
(4月2日に首相官邸で面談した柳瀬秘書官の発言内容について、県が概要メモとして作成)

言うまでもなく「公務員は、全体の奉仕者であって、一部の奉仕者ではない（憲法第15条）」本件は民主主義の原則にかかる重要な問題である。内閣の官僚人事権支配など権力集中の弊害でもある。国会議員は小選挙区制の弊害もあり、政策よりも職業としての議員の地位を保守することに窮々としている。

エリート官僚は権力に奉仕するのではなく、国民のために尽力してもらいたい。官僚は、大谷選手の如く、大志を抱いて天下国家の将来を描いてもらいたい。

○国会議員、官僚に贈る……「名利につかはれて（徒然草・第38段）」

この段は、名利にとらわれて一生を苦しめることの愚を説いて、老莊的世界観を述べたもの。第一に物欲、第二に官位第三に智徳において名を残すことの愚を述べて、最後に賢愚善惡可不可など一切の差別は悟ってみれば、一つに帰してしまうもの、この差別観をはなれた絶対境に立っているのが真人であると、すべての名利を求めることが無意義なことを説いている。現代人も大いに参考となる。

名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむこそ、愚かなれ。

財多ければ、身を守るにまどし。害を貢ひ、累ひを招く媒なり。身の後には、金をして北斗を挂ふとも、人のためにぞわづらはるべき。愚かなる人の目をよろこばしむる楽しみ、またあぢきなし。大きな車、肥えたる馬、金玉の飾りも、心あらん人は、うたて、愚かなりとぞ見るべき。金は山に棄て、玉は淵に投ぐべし。利に惑ふは、すぐれて愚かなる人なり。

埋もれぬ名を長き世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ、位高く、やんごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。愚かにつたなき人も、家に生れ、時に逢へば、高き位に昇り、奢を極むるものあり。いみじかりし賢人・聖人、みづから賤しき位に居り、時に逢はずしてやみぬる、また多し。偏に高き官・位を望むも、次に愚かなり。

智恵と心とこそ、世にすぐれたる誉も残さまほしきを、つらつら思へば、誉を愛するは、人の聞きをよろこぶなり、誉むる人、毀る人、共に世に止まらず。伝へ聞かん人、またまたすみやかに去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られん事を願はん。誉はまた毀りの本なり。身の後の名、残りて、さらに益なし。これを願ふも、次に愚かなり。

但し、強ひて智を求め、賢を願ふ人のために言はば、智恵出でては偽りあり。才能は煩惱の増長せるなり。伝へて聞き、学びて知るは、まことの智にあらず。いかなるをか智といふべき。可・不可は一条なり。いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし。誰か知り、誰か伝へん。これ、徳を隠し、愚を守るにはあらず。本より、賢愚・得失の境にをらざればなり。

迷ひの心をもちて名利の要を求むるに、かくの如し。万事は皆非なり。言ふに足らず、願ふに足らず。

世の名譽とか利益に心奪われて、静かにおちついた暇もなく、一生涯を苦しめるのは誠に愚かなことである。

財宝が多いと一身の安全を守るのに不十分である。即ち財宝は害を招き、苦労を引き起こす媒介物である。死後において黄金をつみかさねて北斗星を支えるほどたくさんの黄金を残したところで、その金の处置の事でごたごたが起り、かえつて子孫にとつては煩いとされるだろう。それから、また愚かなる人の目を喜ばせる楽しみというもの。これもまたつまらぬものである。大きな立派な車や、肥えている馬、黄金珠玉の飾りも、ものの条理のわかつた人はああいやなばかばかしいことだと思うに違いない。だから黄金は山に捨て、玉は淵に投するがよろしい。利欲に心迷わしあくせくするのは、最も愚かな人である。

不朽の名譽を永く後世に残すということは、誰でも望ましいことであろう。しかし位が高く身分の尊いのをば、かならずしも優れた人ということができようか、そうとは限らない。愚かで劣つた人でも、名門の家に生まれ、時運に逢えば高い位にのぼり、驕りを極める者もある。これに反し非常にすぐれていた賢人や聖人で自ら甘んじて卑しい地位におり、よい時世にめぐりあわず逆境のまで一生を終わつた人もこれまた多い。それ故むやみと高位高官を望むのもの財宝を求めるものに次いで愚かである。

名譽のうちで知恵と心において一世に抜きん出でているという名譽も残したものであるが、よくよく考えてみると、名譽を愛するには外聞の良いのを喜ぶのである。そのほめる人もする人もともに長くこの世に生き残つてはいい。その話を伝え聞く人も、又々速やかにこの世を去るだろう。してみると誰に対し我が身を恥じたり、誰に對して自分を知られようと願うのだであろうか、そんな相手はいないはずだ。それに人に褒められることは、また、人に悪く言われる因である。死後の名譽が残つても一向につまらない。それ故、知恵と心においてすぐれている誉を願うのも官位を望むものに次いで愚かである。ただし、無理に智を求め、賢明になろうと望む人のために「知恵がこの世に出てからは偽り」というものが生じたのである。才能は煩惱の増長したものである」といいたい。人から伝えられて聞き学んでいるのは眞実の智ではない。それならどんなものを智といつてよいのか、世にそんなものはないのである。可といい不可といいうのも一条である。一体どんなものを善といいうのか、そんなものはないのである。真人は智もなく徳もなく、功もなく名譽もない。一体誰がこれを承知し誰がこれを伝えていくのか、つたえはしない。これは眞人が徳をかくし愚を装つてゐるのではない。もともと賢とか愚とか得とか失とかいう差別ある境地を超えているからである。迷いの心をもつて名譽利益上の私欲を求めるとき、得るところは以上述べたとおりである。万事は皆一時的のもので、眞のものではない。論する価値がなく願う価値もない。